鹿児島女子短期大学紀要
第45号（2010）53～73頁

人 の 死 と 死 後

〔その三〕

～ カトリックの教えによる人生の展望 ～

（完）

The Human Death and Post-mortem

〔Part 3〕

～ The Vision of Catholic Anthropology ～

（Cont）

霧　島　　怜
Rei S. Kirishima

目　次

４．初代教会による人の死と死後界の理解
５．聖トマスによる人の死と死後界の理解
６．人の今生諸行，その死と死後の禍福
結語に代えて ～ 禍死と福死
註
主な使用文献
Resume

カトリックの教えによる人生の展望
（続）

４．初代教会による人の死と死後界の理解

キリストの教行証を正しく継承した弟子達(使徒教会)と彼らの教行信証の正伝を受け継いだ初代教会も，三位一体の神によって人類に賦与された使命と人間性の禍福的な開きを認識しながら現世的な人毟の価値，人間の正知的で愛善的，又は邪知的で偽善的な性向，生き方の自由選択，決定した道の遂行とそれに順従する果報と責任(自業自得)を日々重視していた．若き教会の内外に現れ始めた神の慈愛の自己本位的乱用と神の正義の非合理的な受け取り方に対して神愛の普遍性とその正義の公平性，神や知らざる勢力による人生の予定説，救済予定説や人魂先在説に対して各人の自由決行権とその結果に伴う責任及び公平正義の賞罰を説く．更に，善悪応報の偶然説(つまり無因有果，因中無果，善悪無報等)に対して善悪応報の自然で必然的な正義とその機能の普遍性及び公正性，又，生前死後無関係説(生前の正邪善悪の生き方と関係なく死後皆が平等に永福，又は無報を獲得するという道徳的な勝手本位主義)に対して，生前の愛神愛人の生き方，又は拒神拒愛や無神無愛という邪悪の生き方に順応する死後の永遠賞罰は一貫して力説されている．

先ほど列挙した見解，特に救人予定説，死後無処罰説，善悪相対説，因果偶然説と生前死後無関

係説という謬説に対して教皇聖座だけではなく，当時教会全体の通説であった教義がユスティヌス殉教者の『第一の謝罪』(AD.151)，シリアのティチァヌスの『ギリシア人への演説』(AD.170)，アンティオキアのテオフィルスの『アウトリクスへの手紙』(AD.181)，イレネウスの『対異端説』(AD.189)，ヒッポリトスの『対ギリシア人』(AD.212)，カルタゴのシビリアヌスの『カトリック教会の一致』(AD.251)，エルザレムのシリッルスの『公教要理講』(AD.350)，ジェロムスの『対ジョウィアン人』(AD.393)と聖アウグスティヌスの『書簡』(AD.412)等の中で述べられている．その中からユスティヌス殉教者，アンティオキアのテオフィルスとジェロムスが明記する教理の要点を以下に紹介する．

『人間各自の善悪に応じて賞罰が報いられると我々は確信している．…もし全ての現象や出来事が「偶然」という道理に自然で必然的に順従していたら，我々は何も為し遂げる事が出来ない．このような道理がもし，甲を善人，そして乙を悪人として発生させたなら，甲を賞賛すべからず，乙も非難すべからず』(ユスティヌス殉教者の『第一の謝罪』, 43章)．

『〔絶対〕神は各自の善悪に応じて報いを与えるであろう．…善行に励みながら永遠不滅の命を求める者(ローマ人, *2*.6-11)に神は「人の目が見た事がなければその耳も聞いた事もなく，そして人の心に思い浮かんだ事もない」永遠の命，永遠の慶福，永遠の平和と憩いを与えるであろう(1コリント人, *2*)．一方，神を拒んだり侮辱したり，又は真理に従わず悪道を意図的に歩む者の上に神の義憤と〔罰の〕怒りが下るであろう(ローマ人, *2*.6-11)』(アンティオキアのテオフィルスの『アウトリクスへの手紙』, 1章14)．

『我が人生の目的は自分の死後の為に最高で様々報賞を具備する事である．…もし，死後，天国において皆は同じ報酬を貰う事が決まっていればこの世において例え，…処女達が何の為に貞節を守って生きるのか．…〔或る謬見によると〕幾ら罪を犯しても痛悔すれば，何れにしても必ず天国で使徒達と同じ栄福の境遇を受けるであろう．だから，皆，自由放題に罪を犯そう(とその信奉者は言う)』(ジェロムスの『対ジョウィアン人』, 2章32)[60]．

キリストの人毟，死者界からの甦り(「復活」)，昇天と聖霊降臨という出来事の経験者であった弟子達がこの世を去った後，キリスト教の普及と共に「愛神愛人」の心を軸とした生き方とその人倫的な秩序も流布し，クリスチャン各自の生き甲斐とその永福希望の土台である「キリストの復活」，「各人の復活」，「キリストの再臨と全人類の最後公審判」，「死後の永遠禍福」，「天国と地獄の性質」，「生前善悪の死後応報(特に永遠処罰)」及び「死後の一時的処罰(煉獄)」に関する信仰定理の理解が深まる一方，様々な謬説と異端説も汚点のように散発的に発生し始める．人毟の一回性と体の復活に関する使徒教会の教理を以下にまとめる．

『私は復活であり，命である．私を信じる者は死んでも〔永福を〕生きる．生きて私を信じる者は永久に死なない』(ヨハネ, *11*.26)．『人間が一度だけ死んでその後審判を受けると〔神によって〕定められている』(ヘブライ人, *9*.27)．『(私達は)キリストが死者の中から甦ったと宣教しているのにあなた達の中に死者の復活はないと言う人がいるのはどうした訳か．…キリストが復活しなかったなら私達の宣教は虚しく，あなた達の信仰も虚しく…キリストにおいて死んだ者達も滅びるであろう．私達がキリストに希望をかけたのがこの世だけであるなら，あなた達は人々の中で最も哀れな者である．…私達は皆，最後〔の公審判〕のラッパが鳴り渡る時，瞬く間にたちまち変化し，…死者

は朽ちぬ者に甦り，…この朽ちる(肉体を有する)者達が朽ちぬ(身体)を着，この死ぬ者は不滅をまとわねばならぬ』(1コリント人, *15*.12-54)[61].

使徒パウロの言葉で表現されているキリスト教的な復活観，特に「体の復活」という教理と「人間界内の人魂非輪廻説」(Non-transmigration of Souls)，つまり，「人毟一回説」に関する異端説が表れた．信仰教理の純正を保護する義務と責任を負っている教皇聖座を初め，カトリックの聖職者と知識人は散発的に表れていた邪説に対し，復活の真義，特に人の復活前後の身体の同一性，復活した人の身体の永遠不朽性，人魂の永遠不滅性，そして，各人の生前善悪の生き方に順応する人体の超現象界的な貴賤，美醜と禍福の境遇等に関する福音書と使徒達の教えを再三説述する．ソクラテスとアリストテレスの人毟観よりも，当時ローマ帝国の東部に流行していた多神教的な哲学とその人間観，特に新プラトン的，ピタゴラス的とオルペウス教系の神秘主義とエレウシス秘儀系の人毟観，更にそれらの折衷であり，融合体である「秘伝霊知教」(Esoteric Gnosticism)はキリスト教を刺激しながら，教会と対立していた．そして，ごく僅かであったが，先ほど言及したギリシア系と小アジア的な密教(Esoterism)系の人毟観の折衷体である「偽キリスト教的な秘伝霊知教」(Semi-christian Esoteric Gnosticism)が頭を出し始めた．この説によると，人が地上で秘伝霊知教とその秘密儀式に遭えず，充分に善行を積まないまま，又は大罪を犯した状態で死んだ場合，当然あの世で神的な永福を得る事が出来ない．しかし，これで悩む必要はない．何故かと言うと，各人が神福を獲得するまで自由で好きなように何度も人間界内に生まれ変わり，自らの人毟をやり直す事が出来ると偽キリスト教的な秘伝霊知教は主張していた．面白い事に，人類の如く古い自己本位主義の一種であるこの秘伝霊知教（主義）は形と表現を変えながら，20世紀の前半に「新時代運動」(New Age Movement, NAM)・「水神時代運動」(Aquarian Age M.)として，米国で再発し，世界中，特に真の一神教に疎い社会内に広がりを見せている．この運動によると，一切の宗教，特に正伝キリスト教が衰廃し，万民の諸信念と永福の諸願望が新しい「人間中心主義」の下で統一される．こうして生まれ変わって超能力を手に入れた「新人類」の各人が今生も死後の永福形態とその得道も好きなように決定し，造り上げることが出来ると彼らは喧しく論説している．そして，初代教会時代の偽キリスト教的な秘伝霊知教と同様に新時代運動の信奉者達(New Agers)が主張するところによると，当時に教会内部で栄えていたキリスト教的な「生物界内の人魂輪廻説」の代表者と猛烈な論弁家がオリゲネスであったようだ．しかし，よく調べて見ると，『マテオによる福音書の注釈書』の13章の１節(AD.248)等の中でオリゲネスはこう明記している．

『人魂輪廻説が神の教会の教理と異質的(外来説）であり，使徒達によって伝えられて来たのでなければ，聖書の中にも根拠がない』.

オリゲネスだけではなく，初代教会の全ての神学者と哲学者がこの秘伝主義的な「生物界内の人魂輪廻説」とそれにあやかった諸謬見，例えば「人魂救済の予定説」を正伝教説として認めていない．以下，先ず『使徒信条』(AD.125頃)から聖アウグスティヌスが著した『信仰，希望と愛の手引き』(AD.421)までに創造主の全能，万人の復活，キリストの再臨と最後の公審判，永遠苦獄の存在，人魂の非輪廻という教理の正解と「自己絶滅願望説」という謬見に関する初代教会の正伝主旨を語る主な代表者

の文の心髄を紹介する．

『私は，…罪の赦しと体の復活を信ずる』(『使徒信条』, AD.125頃)．

『主キリストがこの世の終わりに再臨する時に，あらゆる時代に生きていた全ての人々を彼らの体と共に甦らせるであろう』(ユスティヌス殉教者の『第一の謝罪』, 52章, AD.151)．

『世の終わりに神はあなたの(本来不滅な) 魂と共にあなたの肉体をも不滅なものとして復活させるであろう．…それが実現した時に，信じたいか信じたくないかと関係なく，復活(の現実)を認めざるを得ないであろう』(アンティオキアのテオフィルスの『アウトリクスへの書簡』, 1章, 7-8, AD.181)．

『「死(んで行く当事)者」と「復活(する当事)者」という概念の真義を辯護しなければならない．「死(んで行く当事)者」という表現は現世的な命を生かす霊魂を喪失したモノのみを指摘する概念である．そして,「死者」という概念は指摘する中身が人体においてのみ実現される．つまり，死を迎える時に「死者」が「人体」であれば,「死者の復活」と言った際にも当然，死んだ(当事)者である人体が復活すると言う意味である』(テルテュリアヌスの『対マルツォヌス』, 5章, 3-4, AD.210)．

『多くの者は自分達を死後で待っている悪報を意識するので「死後がある」と認めるよりも，死後が無い事を願望するという事実に私は気付かないのではない．彼らは永遠の処罰を受ける為に甦るよりも絶滅〔100%のゼロ〕に転ずる方が有益だと考えているからである』(ミナツュス・フェリクスの「オクタヴュスへの書簡』, 34章, 11-12, AD.226)．

『イェズス・キリストは全能の神である父の右に座す．…彼の再臨の時に全ての者は自分の体を持って甦なければならないし，自分の過去の諸行の決算報告もしなければならないであろう．善を行なった者は永遠の生命〔の慶福〕，一方，悪を行なった者は永遠の火〔の苦しみ〕に入るであろう(ローマ人, *2*.6-11)．これはカトリック信仰の信条であり，これを誠実に根気よく信じない者は救われない』(アタナシゥスの『信仰信条』, AD.400)．

『全能の神である創造主の力は火事で全焼し，猛獣に食われ，埃滅され，又は液体化した我々の体を甦らせ，再び生命を与える事が出来ない，という考えを直ちに断ち切りなさい』(アウグスティヌスの『神の都』, 22章, 20, AD.419,『信仰, 希望と愛の手引き』, 23章, 89, AD.421)[(62)]．

人間的な魂は地上で身体と結合する前に「イデア界」と呼ばれる天上の霊界に先在するというピタゴラス的及びプラトン的な人間観を土台とする「人魂先在説」(Pre-existence of Souls)，オルペウス教系の神秘主義とエレウシス秘儀の人間救済方法を人間永福の正道とする「生物界内の人魂輪廻説」を否認する初代教会の立場は明確である．数多い論所の中で特に聖イレネウスが著した『対異端』(AD.189)を初め，オリゲネスの『ヨハネによる福音書の注釈書』(AD.229)と『マテオによる福音書の注釈書』(AD.248)，アルノビュスの『対異教徒』(AD.305)，ラクタンツュスの『神命の要約』(AD.317)，ニサの聖グレゴリウスの『人間の創造』(AD.379)，ミラノの聖アムブロシウスの『復活の信仰』(AD.380)，聖ヨハネ・クリソストムスの『ヨハネ福音書を主題とする説教』(AD.391)，聖バシリウスの『六日間の大行』(AD.393)とコンスタンチノープルの第二教会公会議の宣言(AD.553)の教理文をみると，先ほど言及した秘伝霊知教的な救済予定説，人魂輪廻説及び人魂先在説が，正伝キリスト教の人間観，人毟観と救済観に悖る異端説であるとはっきり判る．以下，イレネウス，オリゲネス，クリソストムスとコンスタンチノープルの第二公会議の教

示文の一部を引用する．

『プラトンによると，この世に生まれ変わろうとする人魂の通路を管理する鬼は人魂が新父母の身体に入る前に必ず「忘却の杯」を飲ませる．…しかし，…もし人魂が飲み干す忘却薬は本当に人魂の過去人毟の輪廻とその諸行の記憶を全面的に抹消するならば，プラトンよ，如何にしてお前は忘却薬の杯を飲まされたという事を覚えているのか…〔この事も忘れるはずではなかったのか〕』(イレネウスの『対異端』，2章，35項)．

『人魂輪廻説を謬説として却下する教会聖職者がヨハネ洗礼者の霊魂がエリア預言者の霊魂ではなかったと証明したければ，『ザカリア，…あなたの妻エリザベトは子を産み，その名をヨハネとつけよ．…(彼は)…母の胎内から聖霊に満たされ，…エリアの精神と力を持って主〔キリスト〕に先立つ人である』(ルカ，*1*.13-18)という天使の言葉を裏づけとして引用できる．ここはヨハネの霊魂はその誕生の瞬間からエリアの霊魂であるという事ではなく，ヨハネの精神〔霊知〕とその力がエリアの精神と力に等しいと述べているだけである』(オリゲネスの『ヨハネによる福音書の注釈書』，6章，7や『マテオによる福音書の注釈書』，13章，1)．

『人間界内の人魂輪廻説においてピタゴラスとプラトンの門弟達が言わなかった無礼極まりない言葉はない．それは先ず，人間の魂が昆虫に成ったり，草叢に成ったり，更に唯一の神でさえ同類の霊魂であるというような卑劣な言葉を用いる．…人魂が神と同質的な者であると言うことによって人魂不遜かつ極端に賞賛する一方，豚や馬という…生き物よりも更に卑しい動物のように失敬な言葉を持って扱っている』(クリソストムスの『ヨハネ福音書を主題とする説教』，2章3項6)．

『人間の霊魂は先在していた，即ち，霊魂は霊又は聖なる能力として〔天上界で〕以前に存在していたが，神の観想に飽き，悪に傾き，神の愛を失い，そして罰として肉体と結合するようになったと主張し，考える者は〔カトリック教会の共同体から〕排斥される』(デンツィンガー他，『カトリック教会文書資料集』，403項[コンスタンチノープルの第二教会公会議の宣言])[(63)]．

人類の歴史の中で昔も今も，キリストの教え，使徒達と初代教会の教示を歪曲し，神の正義を「残虐」や「無慈悲」として排斥し，天主が慈悲極まりのない御方であるから正善と邪悪を分別しないかのように考える狡賢い人々は跡を断たない．しかし，聖書だけではなくあらゆる時代の正伝キリスト教はそのような考え方や願望を謬見とし，一貫して否定している．よって，初代教会の正伝教理も正伝代表者の執筆も，使徒達の如く，世間体ではなくキリストの御旨を第一とし，愛神愛人の道を歩んで生きた人々が死後に神福の永遠参加という境遇(天国)を獲得すると説示している．一方，三位一体の神(聖父，御子たるキリストと聖霊)を意図的に否定したり，その救いの恵愛を拒んだり，冒涜したり，神旨を現す社会の正しい秩序(隣人愛)に悖る生き方，例えば家庭破壊，兇悪殺人，姦通，搾取，傲慢，憎嫉，貪慾，瞋恚や誹謗等のような大罪に身を常習的に任せ，悔い改めないままで死んだ者が，自ら決行していた「拒神拒愛」の境遇，つまり「永遠地獄」しか得られないとキリスト及び使徒教会に継いで初代教会も明示している．そして，４世紀に活躍していたエルサレムのシリッルスが論ずる如く，人間は身と心，魂と体の一体である以上，人が行なうあらゆる行為に身体も魂も参加している．例えば，人は神を崇拝する時も冒涜する時も心身ともに行動する．或いは，

この世の実力者は，国際政経組織の搾取とその私利私欲を確保するために他国を侵略する時も，死に瀕する子どもたちに食料を支給する時も，彼らの全身全霊が一体となって判断し，選択し，行動するのである．よって，万人復活後の永遠慶福にも永遠禍苦にも当然，人の魂も体も参ずるであろう．更に，至聖極まりのない神に微罪の影でさえ近づくことが出来ないため，人が生前で犯した諸軽罪に対しも死後に，適切な場で制限付きの期間と境遇をもって償い(煉獄の清め)をしなければならないと初代教会は明確に教示している．

先ず「地獄」の性質とそこにいる者の境遇を説く初代教会の権威ある重要文を以下に引用する．

『家庭を腐敗させている者と悪道を教えている教師達が神の国を受け継がない〔天国に入らない〕であろう』(アンティオキアのイグナツュスの『エフェソ人への手紙』, 16章, 1-2, AD.110)．

『キリストを言葉又は行いを持って否認し裏切った者は減少しない火の苦悶を受けるであろう．一方，善を行い，キリストの福音のために諸苦を耐え忍び，現世今生の贅沢と快楽を嫌った義人は〔天国で〕神を賛美するであろう』(クレメント２世の教説，５章５，AD.150)．

『この世の終わりにキリストが永遠の命で報いる為にクリスチャンと，消えることのない永火で報いる為に拒神や無神の者を裁く為に来るであろう．…唯一の神を崇拝した者に永遠の徳力が賦与され，彼らは何時までも神と共に居るであろう．一方，神を意図的に拒んだ者又は神に帰依しなかった者は永遠に消えない火で罰せられるであろう』(テルテュリアヌスの『謝罪』, 18章，３，44章, 12-13, AD.197)

『聖書は悪徳の者は永遠の処罰を受ける方便を暗示している．彼らは身体を持って罪を犯していたことが事実だから，万人の復活の日に適切な贖罪としての永罰を受容できる能力を具えている身体で甦るであろう．しかし，復活時の身体が今我々は持っている現世的で壊滅的なものではなく，不死不滅にして永存する身体であろう』(ラクタンツュスの『神命の要約』, ７章, 21, AD.307)．

『我々皆は永遠に生きる能力を具えている身体を持って甦るが，皆に同じ徳力を具有する身体が授けられるのではない．義人に天福の身，一方，罪人には罪悪に順応した処罰として，永遠を通じて燃える〔苦悩の〕火に耐え，何時までも焼き尽くせられない人体が賦与されるであろう．…それは何故かと言うと，我々の身体は我々が行う全ての行為に奉仕しているからである．よって，人は過去に行った善悪の果報であり，実りである来生の禍又は福を人体が分かち合うのも当然のことである』(エルサレムのシリッルスの『公教要理講』, 18章, 19, AD.350)[(64)]．

今度は，キリストから永遠禍苦の処罰を宣告され，救われないクリスチャンもいるであろうと明示し,「永遠の処罰がクリスチャンにとっても他人事ではない」と厳しい警告を発する初代教会のユスティヌス殉教者が著した文を引用する．

『神〔とその啓示〕を意図的に拒んだ者達とキリスト教を棄て離れ，悔い改めない心を堅持し続ける者達の為に永禍の火は準備されている』(ユスティヌスの『対異端説』, ５章, 26, AD.156)[(65)]．

超越的で三位一体の神の永福参加を意味する「天国の幸せ」とそれを欠く永遠不幸の境遇を意味する「地獄の苦悶」の他に「煉獄」(Purgatorium)という場と人魂の境遇が認められる．それは何故かと言うと，永遠無限で神聖と清美の極まりない天主の御前に不注意で犯した微罪を持つ者さえ永遠に近づ

くことは許されないからである．よって，生前に軽罪を犯し，充分な償いをしなかった人は死後でそれらの罪に順応する充分な償いと精神的な清めをしなければならない．そして，煉獄における贖罪は最後公審判の時まで必ず終わると説かれている．この償いと清めの環境，期間，方便と人魂の境遇は「煉獄」と称せられる．煉獄における人魂の状況とそこからの開放の方法，つまり祈り，愛の施しと聖人の執り成しについて初代教会の多くの執筆者が論ずる．以下，聖ペルペツア殉教者，聖クリソストムスと聖アウグスティヌスの著作から非常に重要な文のみを引用する．

『七歳の弟ディオノクラテスが病気で死んだその夜に私(ペルペツア)は次のような夢を見ました．高熱で青白く不潔な顔つき，乾き切って入る唇，生前から顔にあった傷と見窄らしい姿を持ち，彼のような数人の居た陰卑な所から何処かへ向かって彼が出て行くのを見た．彼と私との間に隙塹があり，お互いに近付くことが不可能であった．彼が非常に苦しんでいるのが直ぐ解った．…私の祈りは彼の苦しみを和らげ減らすであろうと確信していたので，私はその日から，我々皆が猛獣と戦う拳闘場に移されるまで毎日彼の為に祈っていた．…そして，ある夜，私は以前夢の中で「陰卑な所」ではなく，陽明な所を見た．ディオノクラテスも豪華な服を清々しく艶々した体を持って爽快な表情であった．…これを見た私は彼が処罰のところから解放されたと悟った』(『ペルペツアとフゥリチタの殉教録』, 2巻, 3-4章, AD.202)．

『死者のために祈ったり，祈るように他人を懇願したり，彼らを代表して貧しいものにほどこしたりする事に因って我々は彼らの救いを援助するのである．…しかし，これらの行為が亡くなった信徒に対してのみ有効である．この世を去った入信志願者に対して我々は，…彼らを代表して貧しい者への施与を通じてのみ彼らを支援できる』(クリソストムスの『フィリピン人への手紙を主題とする説教集』, 3話9-10, AD.402)．

『死者の為に祈ることは正しいことである．しかし，殉教者の為に祈るべきではない．却って，殉教者に我々の為に祈るように願うべきである．…教会は教父達からこの見解を受け継いで保持している．』(アウグスティヌスの『説教集』, 159話, 1, 172話, 2, AD.411)．『或る一時的な処罰が今生だけ，ある一時的な処罰が死後だけ，又ある一時的な処罰が今生と死後において執行されるが，何れにしても，一切の一時的な償いは最後の公審判の前に完了される』(アウグスティヌスの『神の都』, 21章, 13, AD.419)[66]．

5．聖トマスによる人の死と死後界の理解

キリスト教だけではなく，西洋の精神文化が産み出した最高の神学者と哲学者，聖トマス・アクィナスはキリストの教行証をもとより，旧約聖書，使徒教会，初代教会と教父達が提唱し堅持して来た人間観を基に，カトリックの「人生観」と「死後観」を神学的にも哲学的にも樹立させた．彼の洞察と理解を手掛りに唯一絶対神の恵愛，人類の原罪性，キリストの贖罪的救済，人毛の使命とその禍福的性向，個人の自由決行とそこから生ずる責任に焦点を合わせて，カトリックの人間理解を既に論説した[67]が，ここで人の死と死後の運命(境遇と状況)について彼の立場の心髄を簡潔にまとめる．

一．人間の使命．各人の霊魂が神の自由で無償の恵愛の故に神の肖像として創造され，生かされている可滅的な者である．神の象りである以上，破滅ではなく，永福の道が開かれているが，

各人が自らの決行を因とする禍苦的な永存も選択できる．

二．人間の被造物性．病苦老死と正邪善悪の性向，行動選択の自由と様々な限界が人間の被造物性の立証である．

三．諸行の価値．唯一神を究極的な創造主とする人は自らの人間性，特に自由と責任を包含する意思の活用によって，神旨の表現でありながら宇宙万行の普遍的な道理でもある「因果法」とその一現である「業報法」(正義)に順じて自他の現状だけではなく，自他来生の境涯とその幸福又は不幸を日々つくり上げている．

四．個人の死後審判．人が死ぬと，人体を離れた人魂は生前の正邪と善悪の生き方に相応しい存続の境遇，つまり，天国の永福，煉獄の清め，又は地獄の永禍が判定される．

五．最後公審判．唯一の神しか知らない時に，宇宙万物の生成進退の終末と完成，特に諸悪と死の破滅が訪れる．その時にキリストは再臨し，御父と万物の前で万代万人を「愛神愛人」という神法を規準に，各人の永福又は永禍を最終的に確定する．

六．神の栄光．人間が神旨に従って天国の永福を得ようと，神を拒んで地獄の永禍を獲得しようと，両方共は神の栄光の公現であり，神の恵愛と正義及び各人の生き方の自然な結果である．

人の誕生，つまり，人体の産出と人魂の創造について聖トマスはこう考えていた．各人が身体を父母から受け継ぐが，人間を個人として成らしめる個魂が父母の身体から産出したり，変成したりする「分合体」でなければ，父母精神の融合体，混合体や変成体でもないと論ずる．更に，個人的で個性的な魂は父母霊魂の分合体でなければ，その融合体，混合体や変成体でもないと論決する．彼によると，各々の霊魂は両親の身体的な交わりに因って生出された固体の為に天主によって創造され，与えられる．それは，唯一無二で全能の純霊たる神のみが唯一無二で新しい霊魂を「100％の虚無から(何の原料がなくても)」創造する事が出来ると『神学大全』の中で論解するのである[68]．

聖トマスによると，人が死ぬ時に人魂と人体が離別し，物質を正体とする屍が解体されるが，人魂は全滅したり，他の事物に変成や輪廻したりするのではなく，人体を離れて存続するのである．そして，身体の死を経験した人魂は自らの本性に属する霊知と認識を神の「特力注入」によって保持され，活用し続けると説く．人体から分離し，他界に渡った人魂はこの世で使用した感覚的な表象を利用し続けるのではなく，自らを可知的な対象に向ける事によるのでもなく，神からの特力注入によって人間性に本有する霊知を通じて自己と他魂を自覚し，認識すると説く．しかしやはり，この世を去った人魂は有するであろうと思われる知識の力量とその内容の質が人魂生前の生き方と神の恵愛に対してとった態度に順応して，各々異なるであろう．彼は『神学大全』の中でそれらの事柄についてこう論述する．

『(この世に生きる個人の)魂が身体と一つに成っている事，そして表象に向う事によって知性認識する事は明らかに魂のより善き事の為であって，それでいて然し，それは身体から分離される事が出来，そして別な知性意識の仕方を持つ事が出来るのである．…分離された魂が知性認識するのは生得的な形象に因ってではなく，又改めて魂の抽象する形象に因ってではなく，又保存されている形象(記憶)に因ってでもなく，…神的な光〔Lumen Divinum〕の流入によって分有されるも

ろもろの形象(即ち，超感覚的知識)によるものである(第89問1項)．……『ルカ福音書』の第16章25節によれば地獄にいた金持ちが「思い出すがよい，あなたは生前良きものを受けた事」と言われている．…〔因って,〕この世で獲得された知識の活動は確かに分離された魂においても依然行われるのである．ただし，同一の仕方でもって行われるのである訳ではない(第89問6項)．……下位諸力〔生理的や下位感覚〕に見出される処の知識〔つまり，人魂の非本質的な感知〕に関する限り，それは分離された魂の中に留まらないであろう．だが，知性そのもの(即ち,人魂の本性を成す霊知,自他認識,悟知的記憶)に見出される処の知識に関する限り，それは当然そこに留まる．…そして,如何なる知性的実体〔substantiae intellectuales,例えば天使,悪魔,人〕においても，神的光の流入による処(つまり,創造主から天然的又は特別に賦与された知的力量)の知性認識の力〔virtus intellectiva〕が見出される．…聖ヒェロニムスは『我々はそれらの知識が天上において我々に〔神光の注入によって〕確保される如き事柄を地上において学ぶ』ように訴えている(第89問5項)』(69)．

次に，聖トマスは，死の経験を経た人魂が死後界に居る同位と下位の永福と永禍の他魂とその境遇を直接且つ完全に察知出来ると説く．一方，自分より上位の霊魂，例えば天使，悪魔や聖人の霊魂とその境遇を直接及び完全に知り得ないが，推理又は神光の注入によって彼らの境遇を間接的に混雑した知識を通じてしか知り得ないと説示する．依然として身近な人魂，例えば親，子，兄弟姉妹，配偶者，職場の知人や生前関係者他の境遇に関する情報も同様であると考えられる．そして，あの世に移った人魂が生前中に関係を持っていた人達の運命とその境遇に関心を持ち続けるのは自然で合理的であると聖トマスも認めていた．更に，時間的と空間的な距離が死後人魂の知能とその活用に悪影響を及ぼす事がないと考えた．又，死後界の人魂は神の定めにより，原則として神の許可無しに，この世の出来事，生者や死後界にいる人魂の活動に干渉出来ない事になっている．しかし，天国の人魂はこの世と死後界の出来事と，そこに居る人魂の境遇とその心境を知ることが出来るが，それも原則としてやはり神の許可や働き掛けがなければ，他霊や他魂の活動に干渉したり，彼らの意識機能を動かしたり，変容したり又は妨げたりする事も出来ないと聖トマスは論ずる．彼はこれらの事柄について『神学大全』の中で下記の如く述べている．

『〔人体から〕分離された人魂は他の〔人体から〕分離された魂を認識するのである．例えば，ルカ『福音書』の第16章23節以下に，金持ちが地獄にあって,(天国に居た)ラザロやアブラハムをみた，と述べられている．…分離された人魂が悪霊も天使をも見る(知性認識する)事が出来るのである．…然るに，全ての分離的・離在的な諸実体に共通の事柄として，彼らは自己の上位も下位に有るものをも自らの実体の様態でもって知性認識する.(彼らは)他の分離された(同位と下位の)魂の様態について完全な認識を持つ．しかし,〔善と悪の〕天使についてその認識は不完全で不充分でしかない(何故かと言うと,人魂の本性とその性能が天使や悪魔のものより下位である)．これは分離された人魂の自然的な認識について語る限りであり，栄光(つまり，天国に居る人魂)の認識の場合は又別のことである(第89章2項)．…(救われていない)人魂でもやはり(この現象界の)全ての自然なものについて認識を持っているが，ただしそれは確実な固有の認識ではなく，一般的で混雑したものでしかない(第89章2項)．…(現世的な)形象，感覚や感覚的な能力が(人体から)分離し

た(あらゆる)魂の内に現実的に(つまり，現世的な形象として)留まらない．分離した魂は個々のものを知性認識するが，然しその全てを認識するのではない．…今一つの知性認識の仕方は神からの形象の流入によるものであり，この仕方における限り，(あの世の人魂の)知性は個々の事物を認識することが出来る．…〔しかし，天使と違って，人体から〕分離された魂は以前の認識からか，…以前の或る情意の働きによってか，…混雑した認識を持つに留まる(第89章４項)．…分離された魂は「神の光による形象の流入」によって個々のものを知性認識するがこの光たるや，近いものに対しても隔たったものに対しても差別を有しない．…場所的な隔たりは決して分離された魂における認識を妨げない．…『ルカ福音書』の第16章23節には「金持ちも死んで葬られた．死人の国へ行った彼は苦しみの中から目を上げ，アブラハムその懐に居るラザロを遥かに眺めた」とある(第89章７項)．…死者の魂は神の規制に従い，又その存在の仕方に従って，生者との交わりから引き離された者であり，物体・身体から分離され離在している如き，霊的諸実体との交わりに結び付けられている者に他ならない．だから彼らは我々の所で行なわれている事柄を〔直接で完全に〕知らない．…然し，この世から彼らの所へ赴く者の魂を通して，或いは天使や悪魔を通して，或いは「神の霊の啓示によって」やはり認識する事が出来る．…又，アウグスティヌスが『死者に対して払われるべきは配慮について』の中で「死者の魂は生者の事柄に介入しない．…だが，やはり生者の事柄について配慮を有することは可能である．…ただ，至福者(つまり聖人)の魂は天使に等しい者であって，天使の如く，生者の所で行なわれている事柄を知らないとは有り得ない」とアウグスティヌスもグレゴリュスも確信して述べている(第89章８項)[70]．

更に，聖トマスによると，キリストの昇天後，聖霊降臨の日に初代教皇使徒ペトロが語った言葉をみれば，イェズス・キリストの生涯，その教行証，特に贖罪的な死，死者界からの甦り，昇天と特別な現存が正伝キリスト教とその誠実な信徒の一人一人の全人生，特に死において比例のない意味と価値を有し，決定的な役割を果たしていると判る．正伝キリスト教の信仰とその哲学的な説明に携わっていた以前の聖哲と同じように聖トマスも聖書，理性，教父達と教会聖伝を軸にキリストの全生涯，特に死の意味，価値と普遍的な役割を詳細に亘って論ずるが，ここはキリストの人毛の使命，特に「死」と死後の「幸不幸」に関する彼の教示を以下にまとめる[71]．

一．キリストの全人毛は，人類を愛する三位一体の神の心，更に神によって計画され，神の御独り子キリストによって成し遂げられた人類の救済を示現するものである．

二．キリストの受難，特に十字架上の死において，人類を赦して救う神の自由で無償の恵愛とその質が証明され，愛神愛人の生き方に励む人々に永遠神福参加への扉が開かれた．

三．キリストは御父なる神の御旨を成就することによって御父から『**天と地の一切の権威が与えられている**』(マテオ, *28*.18)．やがて，絶対神しか知らない時期に訪れる世の終末とその完成時にキリストは，死と諸悪を抹消する為，神の栄光を示現する為，そして，「愛神愛人」の掟に順応して全人類を裁く為に再臨する．

イェズス・キリストの死者界から甦り，昇天の意味とその価値について聖トマスの論篤を以下に

まとめる[72].

一. キリストの死者界から甦り[キリストの復活]が御父への無条件な従順と人類救済の実現に対する御父の応報であり，神の御独り子でありながら真の人間でもあるキリストの前代未聞性と栄光の現世的な示現である.

二. キリストの復活と昇天は愛神愛人の道に励む人々を人毟の絶望，苦悩の無意味と死の恐怖から開放し，キリストに従って生きる者達の死後永福を垣間見せる出来事である.

三. 個人の霊魂と身体の生命が死によって消滅するのではなく，生前の生き方に相応しい新境遇と身体の新様態へ変容するということはキリストの死，復活と昇天によって立証された.

四. 三位一体の神が一切存在の最高無上の主であり，万有千化に自ら賦与した性質と秩序を養成しながら尊重するが，その秩序に何時でも介入出来るという事はキリストの奇跡，復活と昇天を通じて明らかになったのである.

使徒時代の教会，初代教会と教父達の教会に引き続き，聖トマスも人が死ぬと，先ず個人の審判が行われ，各自の天国，地獄又は煉獄が決定されると説示する．そして，神しか知らない時に宇宙の終末と一新，万有の完成，万代万人の復活，キリストの再臨，キリストが主宰する最後の公審判(各人の永禍又は永福の確定と公示)を通じて三位一体の神の栄光の永遠公現が新しい段階に入ると聖トマスは論篤する.

聖トマスによると，先ず復活の時に万代万人の人魂が例外なく自分の身体を貰って甦るがその身体の性質が現世時と違って，永遠に不朽不滅で栄養摂取不要なものであろう．救われた者達の身も心も『太陽のように輝き』，霊妙，無欠無疵で健全，美しい徳力と性能を有し，微細な苦悩の影もない慶福と栄光に満ちているであろう[73]．一方，現世で生きる間に真の神を拒み，悪魔や偶像(多神,仏,拝金拝君他)を拝み，慈愛の道を斥け，自己本位と儚い幸せを追求していた者達が，「拒神拒愛，悪魔と偶像のシアワセ」，つまり「地獄」の境遇と環境(地獄の火)に入るであろう．この「地獄の火」とは，三位一体的神の恵愛の欠如，あらゆる善・美・誠意，慈悲，良識等の欠除，真の神と他者に対する無力の憎悪心及び周囲の残虐に満ちた「環境と境遇」であろう．そして，最悪の苦しみとして「恐怖に満ちた死に切れない死に方」，つまり，これらの者達は，心身的な苦悶のあまり死んで行くであろうが，復活の時に永遠に死ねない身体の特質が彼らに与えられるので，如何に死にたくても死なないし，終わりのない絶望感に悩まされ，永遠を通じて恐怖に怯えて悪魔と悪人と共に存続するであろう．それは，拒神拒愛の自然で正当な果報であり，当に「拒神拒愛的な秩序の仕合わせ」と言えよう．正伝キリスト教の教理と正智正論を基とする聖トマスによると，永遠の地獄を避ける為に四つの方便がある．第一は，心身を尽くして真の神を捜し求め，正信を培う事．第二は，愛神愛人を規準とする断悪奉善の生き方に励む事．第三は，告解(犯した罪を素直に認め，痛悔の心を起し，罪を告白し，謝罪し，罪の赦しを頂き，罪を償い)の秘跡を受ける事．第四は，隣人愛の故に社会弱者を助ける事である[74].

６．人の今生諸行，その死と死後の禍福

キリストの生涯と彼の道に憧れ，従って来た諸聖哲者たちにとって，他の宗教と哲学的な道に見られない人毙の意味とその幸不幸の理解，特に病苦老死の役割及び絶対神の永福参加とその獲得が最大の関心事であり，人生の究極目的でもある．人毙と死後の禍福を考える上で，キリスト教的な問題意識の要点，その解決の範囲と方便を下記の如くまとめる．

一．人の生死苦楽の由来と意味．　二．人の死と人体を離脱した人魂の行方．

三．人の生前の生き方と死後禍福との関係．　四．人は自力で死後永福を確保出来るか．

五．人類，個人とイェズス・キリストとの関わり．

六．釈尊他の歴史的叡智者とイェズス・キリスト．

正伝キリスト教の人間観によると，始祖を初め，万代万人の身体とその諸感覚が現世の物質界に属し，遺伝法に順じて親から子へと受け継がれ，物質的及び心理的な諸理法に順じて生成化育し，進退を積み重ねるが，人に生命を与え，人間的かつ個人固有の機能を維持し，司る人格的で個性的な霊魂が絶対神によって何の媒介無しに直接，各人の為に懐妊の瞬間に創造されるのである．よって，我々一人一人が父母を通じて先祖の心身的な特徴と能力を遺伝として受け継ぐという意味で両親と先祖の「分身」であり，融合体であり，変成体であると言い得る．しかし同時に，各人の霊魂が父母心身の混合や融合等の産物でなければ，親他の先祖の霊魂から産出したり変成したりしたもの，つまり，父母霊魂の「分霊」や先祖霊魂の「合成体」でもなく，全く新しい独立した個霊（個魂）であり，その深奥において根本的に不可解かつ不可侵的な唯一者である．即ち，あなたも私も精神異常でない限り，自分を産んでくれた母親と同一者であり，又は父親その者であると実感したりする事が（出来）なければ，両親の分合霊であり，父母や祖父母の混合霊であるという自己意識と実感は絶対に有り得ない．更に，何人も自他父母他の先祖の人生体験とその記憶の内容は全く（有り得）ない．又，我々一人一人は父母他の自己意識と記憶の内容を直接に読み取れたり，実感することが（出来）なければ，それらを管理したり，交換したり，譲り合ったりする事も絶対に（出来）ない．そして，父母が死去した時も我々の霊魂とその認識性能において本質的な変化は一切生じない．これは，我々一人一人が別個した人格者であり，存在とその個性において本来異なり，独立で自立した人格的，非物質的で非遺伝的（霊質的）な（人魂，自我，個我，個魂とも呼ばれる）「己」を正体とする者であることの揺るがない証拠であると言える．

かくて，正伝キリスト教の人間観は仏教と他の一元論（仏性観，法性論，汎神論，多神論の如き立場）の人間観と本質的に異なる．

先ず，絶対超越的な純霊たる三位一体の神はご自分に象られ，天使と人間等の万有に各々の本性に循応した徳力を稟え，それぞれの本性機能（独立性と自立性）を全面的に尊重し，それらの本性徳力に順じた自由と然るべき責任を伴う活動を委託したのである．しかし，この委託は神の絶対無上の君臨とその能力行進の放棄でなければ，神力全能の削減でもなく，神のみが本有する唯一で絶対

不可侵の権威と地位の失脚を意味するものでもない．

その上，神が人祖に人間本性を遥かに越える心身的な不死，無病老，無苦と自分との毎日の親交(創世記, 3.8)という境遇と環境(いわゆる楽園)を特恩として賦与されたと正伝キリスト教の啓示が主張する．しかし，人祖に続き，現代万民の多くは学識の発展にも拘らず，宇宙万有の究極的な創造主であり，存養主である唯一の絶対神を未だ拒んだり，冒涜したり，軽視したりするのである．多くの人々は始祖と同じように神の叡智と恵愛を示す掟(秩序)を公然と破ったり，軽蔑や無視したりする事によって自分の知識と善悪判断を絶対無上神の叡智よりも優位で正しいものとし，自他を絶対純霊たる唯一神の上に位置づけている．つまり，多くの者達は自分を唯一無比の神よりも賢く貴い存在と見なしたり(自己神格化の罪)，現象界の力・美や悪魔でさえ「神々」として崇拝したり，自国の帝王や指導者を神格視したり，事物・財宝や自国の覇権を神聖で不可侵的な価値としたり，自己本位又は自己中心的な快楽を絶対視したりするという錯覚的な試行(他者多物の神格化の罪)を繰り返しているのである．人祖の「原罪」である自他神格化の錯覚的な試みという叛逆に対して神は人間に与えた特別な恩寵を取り下げたので人々が病苦老死を味わうことになったとキリスト教は説くのである．よって，キリストの明確な教示を元にあらゆる時代のカトリック教会とその諸聖哲は，それらの真理をぼやかしたり，唯一絶対神を軽視したり，唯一絶対神と同等，唯一絶対神に代わる神仏，又は唯一絶対神よりも上位の存在を樹立したり，崇拝したりや認めたりする者達[75]が「クリスチャン」ではないと一貫して堅持して来たのである．唯一無比の絶対神と八百万の神祇，一切宇宙を絶する恵愛と神秘の極まりない位格的な純霊たる創造主と万有に遍在する無定性的な御命たる仏・梵や天，神の御独り子であるキリストと現人神的帝王や超人間的な国家主席・大統領・教祖やスポーツマンの同時崇拝や同等崇敬はお互いに相反する立場であり，心の不合理的な姿勢であるとキリストを初め，正伝教会は二千年に亘って一貫して教示している(マテオ, 10.32)．多くの人々の悪にも拘らず，天主は人類を見捨てることなく，救済の計画を進め，預言者を通じて知恵と慈しみの光をもって善意の人々を救済して来たのである．最後に神は御独り子をイェズス・キリストとしてこの世に派遣し，彼の贖罪的な教行証に因って人類史の中で始めて善意の人々に永遠神福参加への道を示したのである．

人が今生の間にいくら富，名声や快楽を得ても，いくら私利私欲を充たしても，死ぬ時にあの世へ何も持って行けないと知っても，多くの者は高い教育にも拘わらず未だそれを悟らない．ある時にキリストはこう語った．

> 『全世界を儲けても命〔の永福〕を失えば，何の益があろうか．…だから，自分のためにこの世で宝を積むな．…むしろ，自分の為に天〔愛神愛人〕の宝を積め．そこで染みも虫も付かず，盗人が穴をあけて盗み出すこともない』(マテオ, 6.19-20, 16.26-28)[76]．

正伝キリスト教の人間観によると，人の死が人命の終末でなければ人格的で個性的な霊魂の絶無化でもなく，人魂と人体の一時的な分離であり，人魂が永遠新生の慶福又は禍苦へ出発する時である．物質的な心身を離脱した人魂は神の特別な力の注入によって自らの本質である霊知とその本力機能を持続すると見なされている．死の直後に行われる「個人審判」の際，神の慈愛と正義の光に照

らされ，生前の果報として各人のその後の永福又は永禍が決定される．同時に人魂の新境遇と復活後の人体の貴賤的な性能と特徴が決まるのである．

イェズス・キリストを初め，正伝キリスト教の諸聖哲は，死後で「天国」だけではなく，永遠を通じて神の恵愛と慶福参加のない，死に切れない境遇と禍苦の環境を意味する「地獄」も実存すると一貫して教示している．今の世でいくら身分や地位が低くても，いくら貧しく汚くても，いくら非国民や異端者に定められても，どんな身体障害，精神異常や重病を患っても誠心誠意を持って神に縋り付き，キリストとその正伝教会が示す「愛神愛人」の道に全身全霊で励む人々は必ず永遠慶福を獲得するであろう．一方，全世界の主権，富や大量破壊兵器を独占しても，全世界に自由貿易の秩序を普及させても，他国他民や自国民を犠牲にして自称の民衆主義や自国覇権を築いても，それらの行為の責任が国連や国際法廷で正当化されても，現世大宗教の代表者によって祝福されても，死後で全知全能の神の御前で必ず責任が問われ，この世の巨人達が死ぬ前に悔い改めないなら，神の国に入れないであろう．これらのことについてキリストはこう語る．

『私が飢え，…渇き，…裸であり，…牢に入り，…病気であり，…〔経済改革でリストラされ，絶望で自殺を図り，あなた達の解放軍の爆撃で家族を失ったばかりではなく奇形児として苦しんでいた〕時にあなた達は〔それをよく知っても〕助けてくれなかった．…呪われた者よ，私を離れて悪魔とその使い達の為に備えられた永遠の（禍苦の）火に入れ』(マテオ, *25*.31-46)[77].

別の折にキリストは正当な政教の頂点に立ち，神，国と法の名によって平民と様々な弱者を搾取し虐げている政治家と聖職者の放蕩，言行不一致，二枚舌，本音と建前の食い違い及び偽善的な振る舞いを叱責しながらこう警めた．

『呪われよ，偽善者の律法学者〔有識者，知識人，立法権威者〕，ファリザイ人〔言行不一致や二枚舌の者〕よ，あなた達は…立法の中で一番重大な正義と慈悲と忠実を無視している．…あなた達は，杯と鉢の外側を清めるが，内側〔つまり自分の心〕は強奪と放縦に満ちている．…呪われよ，偽善者よ，あなた達は白く塗った墓のようだ．外は奇麗でも内は死人の骨と様々な汚れに満ちている．外は他人の目に義人のように見えても，内は偽善と不義で満ちている．…蛇，蝮族よ，地獄の罰を避けられると思うな』(マテオ, *23*.13-34)[78].

更に，初代教会の正伝諸聖哲はキリスト，その弟子達と聖パウロ（2テサロニケ人, *2*.1-13, ローマ人, *1*.18-2.11, 1コリント人, *6*.9-20）の教示を揺るがない真理とした上で，大罪と小罪の違いを再確認し，大罪を犯し，赦しの秘蹟を受けないままで死ぬ者が地獄に陥るだろうとはっきり述べている（アレーのチェサリウスの『説教集』, 179話2項）[79].

正伝キリストスト教はその曙から一貫して，各自の霊魂が死の直後に生前の愛神愛人〔つまり，『全ての心，全ての霊，全ての知恵をあげて主なる神を愛せよ．そして，隣人を自分と同じように愛せよ』(マテオ, *22*.36-40)[80]〕に順応して永福，一方，拒神拒愛の生き方に順応して永禍の境遇を得ると教示し続けている．更に，神しか知らない時に実現する世の終わりとその完成の日にキリストは御父，一新された宇宙万物と万代万人の前で一人一人の神福参加又は神福と神愛のない永遠の絶望と苦悶の境遇が最終的に確定し公示される．その時に，キリストの愛神愛人の道を歩んだ者達と，その道

に逆らって生きていた者達の「栄光」の真偽が公現され，確定される．

更に，キリストの時代からカトリックの諸聖哲は，人が一度だけこの世に生まれ，一度だけ死に，一回だけ行われる個人審判と一回だけ行われる最後の公審判の為に神の力によって甦り，一度だけ，義人達が永福，偶像崇拝者が永禍の報いを受けるという教理を堅持している．よって，人魂の先在説をはじめ，生物界内や人間界内の人魂の輪廻を説くギリシア的や「新時代」的な輪廻説，又は，万界内の人魂の輪廻を説くヒンズー教的と仏教的な輪廻転生説がキリストの教示とその正伝に反し，聖書の中に根拠がなければ，弟子達によって伝えられた教説でもないと一貫して保持している．

カトリックの人間観は，キリストの教行証を正しく継承している使徒，諸公会議，教父達，聖トマスと後世の諸聖哲の論説をもって，人魂の死後様態とその境遇の運命について次ぎのような立場を堅持している．

一．人死とは，人体と人魂の現世的な離別である．人体は死ぬが人魂は霊知的な性能を保持しながら天国，苦獄又は煉獄で存続する．

二．人魂の天国，苦獄又は煉獄の境遇貴賤は生前の宗教的と道徳的な生き方に因る．

三．神の至聖，恵愛と正義の故に一時的な清めと小罪賠償の時場と境遇(煉獄)がある．しかし，その償いは最後の公審判までに必ず終了する．

四．人魂同士は死後界で自他を認識するが，その仕方が生前の心身的な諸感覚に基づくものではなく，神光の注入による霊知である．

五．神愛の永福を拒否した(地獄の)人魂は，現世に居る人々や出来事について一般的で混雑した，しかも限られた知識能力しかない．それは生前で何等かの関係にあった者や事柄についての記憶と死後界に新しく渡った同類の人魂からの情報である．一方，神福に参ずる人魂は，獲得した栄光に相応し，かなり高度で天使に似たような知識を持つと見なされる．

六．地獄の人魂はあの世で自分と同位又は下位の人魂の境遇貴賤を把握し，意思の疎通も完全に出来るが，上位の境遇について僅かしか知り得ないし意思の疎通も困難であろう．しかし，天国の人魂は，神の特恩によって天使の如き知力を有し，上位の霊魂に関しても優れた知識を有するであろうと推定される．

七．天国の人魂と現世の生者は祈りと愛善的な行いによってお互いの境遇を改善支援できるが，改悪は出来ない．一方，生者と地獄の人魂はお互いの境遇を改善も改悪も出来ない．

八．救われた人魂は現世生者の意思決定に直接影響を及ぼす事が出来ないが，神の特恩や天使の媒介によって間接的に善良な変化への好機を作ることが出来る．一方，地獄の人魂は生者の意思決定に如何なる影響も及ぼすことが出来ないのである．

九．最後の公審判は三位一体的な神の栄光，宇宙万有の完成(Grande Finale Cosmico)と「愛神愛人」の不退転勝利の公現となる．同時に諸悪，死と「拒神拒愛」の最終的完敗の確定となる．天国の永福も地獄の永禍も絶対神の恵愛，栄光と最終的勝利の公現である．

キリストを初め，カトリック教会も今尚，永福の獲得を強要するのでなければ，悪人を永禍で脅迫するのでもない．同時に，死後の天国又は苦獄が各自の自主的な決断を基とする「愛神愛人」又は

「拒神拒愛」の生き方及び神の恵愛との協力の結果であると一貫して，昔も今も明確に教え続けているのである．そして，一切を絶する神の御旨に対する反逆や蔑視，神が制定した秩序の無視や軽視と神の恵愛の冒涜である各人の大罪，特に被造物の「神格化」と「人意の絶対化」の如き罪の賠償とその罪科の清算(贖罪)が，被造物に過ぎない人間だけに不可能な業であると観ずる．幸いに，キリスト自身と彼の教行証を正しく理解するカトリック教会は『〔三位一体の〕神は御独り子を与え給うほどこの世を愛された．それは彼を信じる人々が皆〔地獄で〕滅びることなく，〔天国で〕永遠の命を受けるため…神が御子を世に遣わされたのである』(ヨハネ, 3.16-18)[81]という神の無償恵愛に因る贖罪的な救いの「福音」(喜ばしい知らせ)を昔も今も万国万人に伝えているのである．

クリスチャンでなくても，キリストの教行証を少しでも心眼でみるならば，彼以上に幸せな明日を人々に示し，彼より素晴らしい業を成し遂げた者はいないと誰もが認めるであろう．更に，謙遜で無我的な心眼でモノゴトをみるならば，想像を絶する宇宙万有の極大極微，精妙な構造とその不思議な秩序，我々の霊魂の唯一性とその神秘，キリストの教行証，特にその慈愛の業(真の奇跡)，十字架上の死，死者界からの甦り，昇天，そしてキリストの真従者(例えば，マザー・テレサと過去の諸聖者)にしか見られない真愛の行いを通じて，三位一体的神の偉大さ，無償の恵愛，御子キリストの奉命に示されている救済的な博愛，赦罪の慈愛と人心に沁みる目立たない現存の愛に現代人が気付けないであろうか？　だが，これらの愛を受け入れて自他来生の準備にかかるか，それとも,「唯一神が死んだ，怖れるべき者はもはやいない」と主張する者と共に「永遠を通じて神の恵愛と慶福の自他苦獄」の準備にかかるかは個人の自由選択である．死んだら，その準備の最終的な実りが必ず明らかになる．いや，「人の心は死の寸前に自分の来生を垣間見る」と言われている．

結語にかえて ～ 禍死と福死

キリストを初め，諸聖悊は「人を救う道」，つまり，人を幸せにする生き方を自分のメッセージの中核とするものである．幸せになりたくない人はいないが,「真の幸せ」や「真福の正道」を全身全霊で追求する者は少ない．だから，いざ死に直面すると，怯えながら偶像(の神仏)に縋るから似非宗教の詐欺に遭い，そして，それに気付かないままで息を引き取る者が非常に多い．幸せな人生は幸せな死(福死)を準備し，不幸な人生は不幸な死(禍死)をもたらすとも言われますが，幸せな人生と幸せな死とは？ ここで，良識と本音を背景に「答えを要しない問い」の形をもって禍死と福死について語りたい．

知名度，財宝と権力の栄光を味わい，暖かい個室の中でぽっくり死ぬのは福死であり，大往生であると誰が断定し，保証したのか．むせび泣く親戚，国民と最強の医師団に見守られ，眠っているように息を引き取るのは本当に福死であろうか．であれば，命が授けられ，名もないうちに自分の父母の決定で，人命を助けるべき医師に因って殺される胎児の死は「人」の死であろうか，病院処置室のごみであろうか．更に,「激しい病が起こり，死ぬほど烈しい赤痢の苦痛が生じ」，疲れ果てて沙羅双樹の下で息を引き取った釈尊の死は「大往生」ではなかったのか．十字架に磔にされ，罵るユダヤ教の司祭達，群衆とローマの兵卒達を上から眺め,「父よ，彼らをお赦し下さい」と祈り，そし

て，およそ三時間後に「父よ，我が霊を御手にゆだねます」と呼び，亡くなったキリストの死は「不幸」であったのか．唯一無比の神を崇め，背教を断り，徳川等の時代に虐殺されたカトリック教徒の死が「禍死」であったのか，正義の処罰であったのか．覇道と放埒の慾に燃えて自分より上の存在を認めなかった将軍家と天皇家の暴君たちとその家来，又，特権を得る為にカトリック司祭と信徒を中傷したり，密告したりしていたイギリスとオランダのプロテスタントの者達，更に，自分たちを「平和，悟りと慈悲の宗教」と称し，クリスチャン迫害を積極的に進めていた日蓮宗等の僧侶達と領主達[82]の死が本当に「真福」の死であったのか．

唯一無比の神を「**殺した**」後，神権を手にしたニーチェ，ヒトラー，レーニン，スターリン，毛沢東と彼らの応援者の死は「福死」であったのか．アウシュビッツ(Oswiecim)という大虐殺所の餓死室で，若い父親の身代わりとなり，15日間を耐え忍んだ後，毒薬の注射を打たれ「**めでたし，聖寵満ち満ちてえるマリア，…罪人なる我らのために今も臨終の時も祈り給え**」と祈り，この世を去ったカトリック司祭，マクシミリアン・M.コルベ(囚人番号16670)の死は「わざわい」であったのか．ソ連共産党政権時に非道を極めたウクライナ，ロシアとベラルシのクリスチャン，特にウクライナのグレコカトリックの信徒とその聖職者に対する迫害時に虐殺された数十万人の死[83]は，無駄で「不幸な死」であったのか．

イェズス・キリストを初め，カトリック教会とその真の信徒は昔も今も，真正な宗教を「終生誠実な愛神愛人の生き方」として理解し，公私生活の諸面においてそれを実践しようと努めている．善意，正知と責任を持って生きようとする者は皆，因果律とその一現である業報法も当然受け入れる．それを前提に，現世今生中に行う正善に対して死後来生にも善報と慶福の境遇，現世今生中に行う邪悪に対して死後来生にも悪報(処罰)だけが納得行く合理的で適切な賞罰であると認めている．一方，宗教を反科学的な迷信，愚痴や阿片，又は単なる装飾として扱い，真の神(超越的な天主)を無視し，他人を私利私欲を充たす道具として利用し，本位気儘に生きる者達は責任を逃れようとして上記の理法を否認する．彼らにとって，自ら行って来た罪悪に対して正義の処罰が怖いから，今生の悪質的な行為に対して来生での永遠処罰を認めるよりも，「皆は**平等**に永福を獲得し，又は絶無(100%のゼロ)に転ずる」と主張する方が好都合である．だが，皮肉なことに，絶対神の正義，個人死後の存続と賞罰を否定する者達こそ，被害に遭った時に，加害者の悪行が「絶対に赦されるものではない」と大声で喚きながら厳罰を追及するのである．

我々を愛する唯一の絶対神，その御独り子キリストと聖母マリアを，非クリスチャンも軽視してはならない．何故かと言うと，絶対神が「**タダ御ヒトリ**」，各人の人毟も「**タダ一回**」，そして，真の救い主が**イェズス・キリストだけ**である．キリストだけは，**前代未聞の生涯**，特に「愛神愛人」の教行，全人類の「諸罪を贖った死」，「死者界からの復活栄光」と永遠至福を垣間見せる「昇天」を通して万人の困却難問に見事に答えたのである．キリスト以外に「死者界から甦って昇天した」者がいなければ，彼以外，全人類の前でそれを主張する勇気を持つ者もいない．老子，孔子，釈迦牟尼，ムハマッド，天皇，国家主席，スポーツ・芸能・霊媒や新興宗教の「神々」がそういう「業」を成し遂げることが出来たならば，彼らの崇拝者達が諸報道機関を通じて毎日，想像を絶する賛美と騒ぎをするに違いない．

一方，誠意をもって，人毟の困却難問に納得行く解決を試みた者の中で，特にユダヤ教の預言者，

釈迦牟尼，アリストテレス，老子や孔子の教行信証が際立ち，彼らも人心の発展と幸せに貢献したと真理を愛する者が必ず認めるであろう．そして，三位一体の絶対神の摂理により，上記偉人の教行信証がキリストの教行証の前兆であり，キリストを受け入れる為の準備であり，キリストにおいてのみ成就するものである．それらの偉人の中で特にユダヤ教の正伝にみられる「救世主降誕の預言」と仏教正伝の「弥勒菩薩出現の思想」が暗示する万代万人の救済的な願望と救世主到来の期待感がイェズス・キリストの出現とその教行証において見事に実現したのである．

福死とは，禍死とは？キリストについて知る機会と能力のなかった人々は，自然法（「敬天仁人」又は「敬仏慈人」）に則って誠実に生き，人毟の真理を誠実に捜し求めたかどうかに因って死と死後の「禍」又は「福」が決まる．しかし，クリスチャンとクリスチャンではなかったが，高い教育を受けた（のでキリストの史実を知る機会が沢山あった[84]）人々，特に指導的な地位にあった者の禍・福の死と死後を分けるのは「愛神愛人」（愛天愛人）の生き方である．「福死」とは，来生の神福永遠参与へ扉を開く死のみである．キリスト教の聖者の如く死を歓迎する事が出来なくても，本音で唯一の天主を愛し，己の如く他人を愛しようと努めた末，死前に「**キリストよ，聖母よ，御手に我が霊を委ねます**」と念じてこの世を去るのは最高の神恵であろう．しかし，上記の心境に達しなかったならば，キリストの右側に十字架に磔にされ，自分の人生を無念恐怖の内に清算しようとし，過去の罪を痛悔していた強盗殺人の囚人のように『イェズスよ，あなたが〔天国の〕王位を受けて〔最後の公審判を行うために再び〕来られる時，私を思い出して下さい』(ルカ, 23.42)[85]と罪の赦し及び慰めをキリストに乞い願うことによって，人生の津波で疲れ果てた心に救いの希望が芽生えたままで死ぬことが出来れば幸いである．

〈完〉

註

(60)　“Reward and Merit”, in: http://www.catholic.com/library/rewardandmerit.asp（pp.1-4）.

(61)　『聖書』（新約篇），pp.156, 270-272, 345.

(62)　“Resurrection of the Body”, in: http://www.catholic.com/library/resurrectionofthebody.asp（pp.1-5）.

(63)　“Reincarnation”, in: http://www.catholic.com/library/reincarnation.asp（pp.1-4）．デンツィンガー・シェーンメッツアー，ibid, p.96（403項）.

(64)　“The Hell There Is”, in: http://www.catholic.com/library/helltherеis.asp（pp.1-5）.

(65)　“Mortal Sin”, in: http://www.catholic.com/library/mortalsin.asp（pp.1-3）.

(66)　“Roots of Purgatory”, in: http://www.catholic.com/library/rootsofpurgatory.asp（pp.1-4）.

(67)　『人毟の禍福的運命』, その四と五，特に（1）（2）（5）（6）（8）を参照.

(68)　『神学大全』, vol.7, pp.44-46.

(69)　Ibid.vol.6, pp.375-384, 394-396, 390-393. 聖トマスはプラトンの考えを受け入れていないが，それを次のようにまとめている．
『（人の）魂が身体に結び付けられている事によってしか何ものをも知性認識することが出来ないが，…身体という障害が除去されるにおいては魂は自らの本質に復帰し，自らを表象に向けることによらずして端的に可知的なる知性認識出来る』（ibid. p.376）.

(70)　Ibid. vol.6, pp.382-389, 394-402.

(71)　沢田和夫mibid., pp.157-165，デンツィンガーシェーンメッツアー，ibid, pp.3-17（10-72項）, 19（76項）, 27（125項）, 38（150項）, 123-124（539項）. デュフール・X.L, ibid., pp.107-112, 371-373, 619-622, 722-725, 384-391, 693-695, 722-

725.

(72) 沢田和夫, ibid., pp.165-166. デンツィンガーシェーンメッツアー, ut supra. デュフール・X.L.,ut supra.

(73) “The Catechism of Saint Thomas Aquinas”, in: http://www.cin.org/james/ebooks/master/Aquinas/accreed11.htm [‘The Resurrection of the Body’],(pp.1-5).

(74) “The Catechism of Saint Thomas Aquinas”, in: http://www.cin.org/james/ebooks/master/Aquinas/accreed12.htm [‘Life everlasting, Amen’],(pp.1-4). ibid., in: http://www.cin.org/james/ebooks/master/Aquinas/accreed07.htm [‘From thence He shall come to judge the living and the dead’],(pp.1-5).

(75) 現在の日本も神仏多神教(神仏混合教)の国であり，国家勢力が事実上で他宗教を無視しながら天皇制を最優先し，その神事に公に参加している．現内閣総理大臣,麻生太郎氏も同様であった．彼は2009年の春国会中で議員の質問に対して「私はカトリックである」と答弁したが，戦犯者を合祀し,「祭神」として拝む靖国神社の秋と春の季例祭に「内閣総理大臣」として真榊を奉納し,『国のために尊い命を投げ出された方々に対し，国民として感謝，敬意を表すものだ』と自分の行為を説明した[http://www.asahi.com/politics/update/0421/TKY200904210273.html]．更に,彼は同年１月４日に人間と国民の差別的な優劣を公に主張している天皇制(神国思想,国家神道)の象徴であり，天皇の「祖神」を祭っている伊勢神宮に公式参拝し,『厳かな気持ちでお参りをし，国民の安寧，国家の繁栄を祈りさせていただいた』と語った［http://blogs.yahoo.co.jp/yoshimizushrine/56464911.ltml］．それに対して，日本カトリック司教中央協議会は「正義と平和協議会の部会長」の名義で正伝キリスト教の代表として抗議声明文を公表しただけである[「麻生太郎首相の伊勢神宮参拝に抗議します」という文名]．しかし，キリストの教えとそれを今日までに堅持し，正しく伝えているカトリック教会(とその諸聖恕)の心眼でみて，上記の参拝と奉納は憲法違反だけではなく，絶対唯一である三位一体の天主よりも天照大御神と戦犯者を公に崇拝し，悪道を美化する「偶像崇拝と背教」の行為である．真のカトリック教徒であれば，論外の行為である.〔(ルカ, 16,13, ヨハネ, 13-15章, １コリント人, 6.9-20. “Catechism of the Catholic Church”(Holy See)と「カトリック教会のカテキズム」, 2084-2089, 2104-2117項を参照)〕.

(76) 『聖書』(新約篇)，pp.13, 29.

(77) Ibid., pp.43-44.

(78) Ibid., pp.39-40.

(79) “Mortal Sin”, Ibid., p.3. 註64と65.

(80) 『聖書』(新約篇), pp.38.

(81) Ibid., p.139. “Catechism of the Catholic Church” [Catechismus Ecclesiae Catholicae, 略して, CCC], Sec.Ed, Libreria Editrice Vaticana, 2000(1997), 特に106-114 [nb.422-455], 129-178 [nb.512-682], 254-276 [nb.976-1065], 334-382 [nb.1212-1532], 452-458 [nb.1846-1876], 505-660 [nb.2083-2756].『カトリック教会のカテキズム』, 日本カトリック司教協議会(訳監修), カトリック中央協議会出版, 2002, 特に pp.130-139 [422-455条], 154-205 [512-6823条], 295-318 [976-1065条], 379-468 [1212-1532条], 551-561 [1846-1876条], 618-801 [2083-2756条].

(82) たとえば,日直和尚と承兌という僧侶たち．熊本の領主，加藤清正は日蓮宗の熱心な信徒として知られている．さらに,イギリス人，W.アダムスは家康の高い信用を得ていたことで有名である.オランダの商人たちも反カトリック的で,カトリックのイェズス会の宣教師たちを将軍達と地方の領主達の前で中傷したり,密告したりしていたのは史実である.片岡弥吉,『日本キリシタン殉教史』, 時事通信社, 1979, 特に pp.212-271(日蓮宗と加藤清正による迫害), 173-194(将軍家康, W.アダムスとオランダ人), 481-498(迫害の方法);溝部脩(監),『キリシタン地図を歩く』, ドン・ボスコ社, 4 2006(1991), 特に pp.32-44(京都殉教者), 70-81(雲仙地獄), 117-127(熊本の八代の殉教者);日本カトリック司教協議会(編),『ペトロ岐部と一八七殉教者』, カトリック中央協議会, 2007. 2007年11月24日に長崎市で「日本の188人」(30人が１歳から15歳未満の子ともたち)の殉教者の列福式が挙行された.カトリック教会は彼らに「福者」という称号を公示し,その秀徳を讃える.

(83) John Sianchuk CSsR(ed), “Blessed Bishop Nicholas Charnetsky C.Ss.R. and Companions, Modern Martyrs of The Ukrainian Catholic Church”, Liguori, 2002. Nicholas L.Chirovsky(ed), “The Millennium of Ukrainian Christianity”, Philosophical Library Inc, NY, 1987, 特に pp.147-197.

(84) マテオ. *23.*13-34, *24.*15-44；ローマ人. *1.*18-*2.*11；１コリント人. *6.*9-20；２テサロニケ人. *2.*1-13. そして註(62)が指摘するアントィオヒァのテォフィルス(AD.181)とミナツュス・フェリクス(AD.226)の言葉を参照．クリスチャンではないが,高い教育を受け,キリストの教行証の歴史的事実を知る機会が沢山あった人々の罪とその責任について使徒パウロの言葉の一部を下記に引用する.『神について知りうることは，彼ら(異邦人)にとっても明白だからです．神はそれを彼らに現わされたからである．神の不可見性即ちその永遠の力と神聖は，世の創造の時以来，その御業について考える人にとって見えるものである.したがって彼らは言い逃れが出来ない.彼らは神を知りながら,これを神として崇めず…彼らは自ら知者と称して愚かな者となり,不朽の神の栄光を,朽ち果てる人間,鳥,獣,這うものに似た形に変えた.』(ローマ人. *1.*18-23).

(85) 『聖書』(新約篇)，p.129.

主 な 使 用 文 献

Biblia Sacra（Vulgata）, 2vls.	Deutsche Bibelgesellschaft		[4]1985［‘69］
聖書（旧約・新約）	バルバロ，F. 訳	講談社	[2]1981［‘80］
Catechism of the Catholic Church（CCC）	Holy See	Lib.Ed.Vaticana	[2]1997［‘94］
カトリック教会のカテキズム	日本カトリック司教協議会	カトリック中央協議会	[2]2002［同年］
（第２ヴァチカン）公会議公文書全集［別巻］	南山大学監修	中央出版社	[2]1976［‘69］
カトリック教会文書資料集	デンシンガー他（編）	エンデルレ書店	1974
カトリック教会の教え	日本カトリック司教協議会	カトリック中央協議会	2003
Creation and Evolution	Schönborn Ch. & Others	Ignatius Press	2007
Chance or Purpose	Schönborn Chr. Card.	Ignatius Press	2007
神学大全（聖トマス・アクィナス著）	高田三朗（全訳責）	創文社	1960-1967
トマス・アクィナスの三位一体論研究	片山寛著	創文社	1995
神学大全入門	沢田和夫著	あかし書房	1987
アウグスチヌスと13世紀の思想	高橋亘著	中央公論社	1980
アウグスティヌスの哲学	谷陸一郎著	創文社	1994
友のためにささげたいのち	千葉茂樹著	女子パウロ会	[6]1992［‘82］
命の尊さを語る	マザーテレサ	中央出版社	[2]1985［‘83］
希望の扉を開く	ヨハネ・パウロ二世著	同朋社	1996
聖書思想事典	デュフル・X.L. 著	三省堂	1983
パウロ・親鸞・イエス・禅	八木誠一著	法蔵館	[2]1986［‘83］
死と永遠の生命	大林浩著	ヨルダン社	1994
死の神秘	デュフル・X.L. 著	あかし書房	1986
聖堂の日の丸	宮下正昭著	南方新社	1999
カトリック教会の戦争責任	西山俊彦著	サンパウロ書店	2000
仏教聖典	山口益著	平楽時書店	[2]1974［同年］
死とは何か	大法輪編集部篇	大法輪閣	[5]1991［‘87］
往生要集上下	原信著（石田訳注）	岩波文庫	[2]2003［‘92］
真言の教学上下	勝又俊教著	国書刊行会	1981
解脱	日本思想研編	平楽時書店	[2]1988［‘82］
業論	福原亮厳著	永田文昌堂	1982
菩薩観	日仏思想研編	平楽時書店	1986
大生死観	加藤咄堂著	史籍出版	[2]1982［‘08］
神道の生死観	安蘇谷正彦著	ぺりかん社	1989
仏教とキリスト教の比較研究	増谷文雄著	筑摩書房	[21]1985［‘68］
立体哲学	渡辺義男編	朝日出版社	[9]1976［‘73］
新宗教事典	井上順孝編	弘文堂	1990
万有百科事典，vol.4（哲学・宗教学）	小学館篇	小学館	1974
アルファ・大世界百科事典		日本メール・オーダ社	1971
日本キリシタン殉教史	片岡弥吉著	時事通信社	1979
キリシタン地図を歩く	溝部脩監	ドン・ボスコ社	[4]2006［‘91］
ペトロ岐部と一八七殉教者	日本カトリック司教協議会監	カトリック中央協議会	2007
Patterns in Comparative Religion	Eliade M.	Sheed & Ward	[2]1971［‘58］
Storia delle Credenze e delle I. Relilgiose	Eliade M.	Sansoni Ed.	1979
Le Grandi Religioni, VI vls	Rizzoli Editore		1976
The Millennium of Ukrainian Christianity	Chirovsky N.L., ed.	Phil. Library Inc.	1987
Blessed Bp.N.Charnetsky C.Ss.R and Comp.	Sianchuk J.	Liguori Publ.	2002

Eternal World Television Network［EWTN］, “The Catechism of St.Thomas Aquinas”, in :http :// www.cing.org/users/james/ebooks/master/aquinas.

Catholic Answers, “Reward and Merit”, in : http ://www.catholic.com/library/rewardandmerit.asp.[03.VIII], (pp.1-4).

Ut supra, “Resurrection of the Body”, in : http ://www.catholic.com/library/resurrection ofthebody.asp.[03.VIII], (pp.1-5).

Ut supra, “Reincarnation”, in : http ://www.catholic.com/library/reincarnation.asp.[03.VIII], (pp.1-4).
Ut supra, “The Hell There Is”, in : http ://www.catholic.com/library/hellthereis.asp.[03.VIII], (pp.1-5).
Ut supra, “Mortal Sin”, in : http ://www.catholic.com/library/mortalsin.asp.[03.VIII], (pp.1-3).
Ut supra, “Roots of Purgatory”, in : http ://www.catholic.com/library/rootsofpurgatory.asp.[03.VIII], (pp.1-4).

Resume.

The Human Death and Post-mortem

〔Part 2 & 3〕

～The Vision of Catholic Anthropology～

This paper outlines the Catholic perception and understanding of human death, the post-mortem, their meaning and relation to the existential potentiality, imprinted (through the act of creation) in the essential nature of each human person to choose, strive and attain one of the two existential states of eternal destiny. All of the orthodox Christian thinkers affirm the inseparable and existential dependence of all human beings on the power and free will of the Creator. All of them emphasize the innate orientation of the human nature, directed towards the ultimate and eternal yet ‘in se’ bi-polar goal of human existence. In Buddhism it is the eternal bliss of the ‘Nirvana’ or the doom of reincarnations ; in Catholicism it is the participation in the Personal God’s eternal felicity or its rejection, ie. a participation in the godless doom of eternal perdition.

Jesus Christ, the Apostolic tradition and Catholicism uphold that all human beings are created *in the image of the Triune God*, are sustained in their existence out of the entirely free and loving grace of God and are endowed with a free will and all necessary virtues and means, to choose and acquire the eternal felicity with God or a doomed state without God’s loving grace. Thus in Catholicism every human person through his/her free decisions and deeds is constantly weaving his/her terrestrial happiness and glory in heaven or a hellish state of eternal existence after death.

‘Death’ in Christianity is neither an annihilation of the human soul nor a transubstantiation of individual human nature into other beings, but the culmination of human soul’s terrestrial existence and receiving of a new form of existence, corresponding to the so ul’s religious and moral quality of the terrestrial life. In orthodox Christianity there is no need in proving the unique value and universal importance of Jesus Christ’s redemptive terrestrial life, his sacramental and salvific presence in the world through his Church. It must also be said that the validity, 100% credibility and reliability of Christ’s message is substantiated by his unique life and deeds. The quintessence of Christ’s relation to our individual life, death and the post-mortem is illustrated in the Gospels.

The Apostolic Church and The Persecuted Church emphasize the inseparability of our death and the post-mortem destiny with the Christ’s redemptive life, particularly with his expiatory death & resurrection, our religious and moral response towards the God’s love manifest in the Christ and in the history of the world. The Church under the primacy and leadership of the Roman Bishop (the only legitimate successor of St. Peter) corrects errors, heresies and other schismatic views, which were and remain inconsistent with the Christ’s teachings and Apostolic tradition. The Church and her orthodox theologians & philosophers reject any sort of pre-existence, migration, transmigration or reincarnation of the human soul, and any form of Gnosticism, Esoterism or Idolatry.

St. Thomas Aquinas (XIII c.) upholds with the Catholic Church that the human soul is created by God, for each person; that every human soul is a spiritual substance, which retains all her essential powers after death ; that no one will ever escape the personal responsibility before God for his/her moral acts; that the Christ’s expiatory redemption applies to all people, yet it does not run against the personal freedom of those who reject God and His love.

Summing this paper up it may be said with certainty that, those “who sowed with Christ, will harvest with Christ”, and those who sowed with devils, Hitler, the deified rulers or exploiters, will harvest with devils, Hitler, sham gods and exploiters. It thus can be said that the “happy death” is only the death, which ‘opens the gates’ leading to the eternal participation of individual soul in the felicity of the True God.

（2009年12月14日　受理）